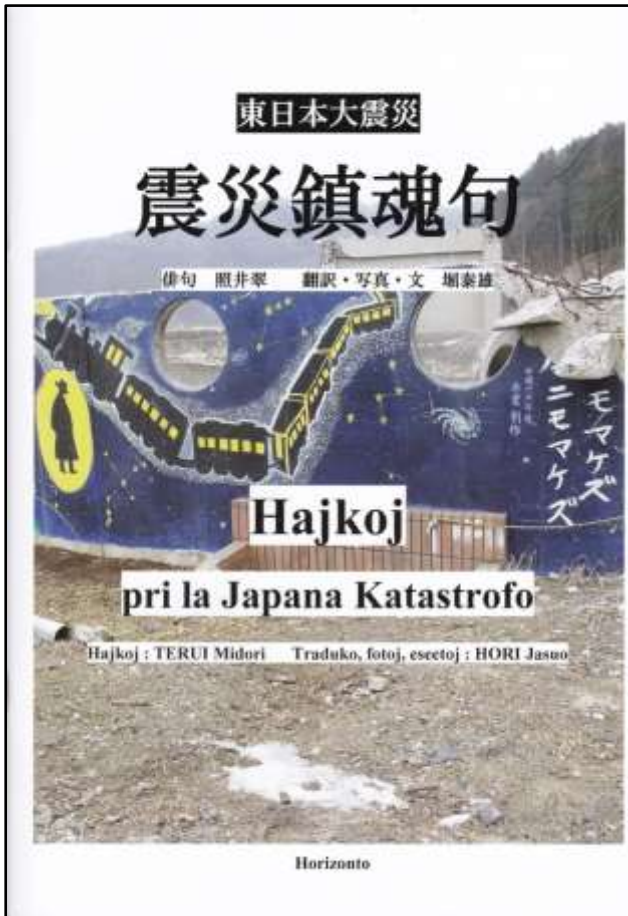


「東日本大震災 鎮魂俳句」出版に寄せて



出版に至るまで

東日本大震災後、釜石市唐丹の小中学生 100 人を支援する運動に参加したので、釜石市を訪問することが多くなった。震災直後から、瓦礫や全壊・半壊の家屋の片づけがどんどん行われ、震災の傷跡は急速に消え去った。その中で、最後まで残っていたのが、桑畑書店だった。モダンな建物で、釜石の文化を代表するような存在だった。桑畑さんは、そこにまた「桑畑書店」を再建したいという希望を持って、最後まで頑張ったのだが、ついにそれは無理だという結論に達し、建物は取り壊された。今も桑畑書店は、石応寺の門前に出来た仮設の商店街で、本屋を継続している。

私もインテリの端くれなので、被災地の本屋さんがどんな状態なのかに関心があり、釜石に行くたびに、桑畑書店に寄る。そのたびに、事前にほしい本を注文しておき、行ったときに受け取るようにしている。その他、全国紙には出ないような地方で出版される本も貴重なので、桑畑書店の棚で、そういう本を探しては購入する。桑畑書店への支援、また地元の小出版社とその著者への支援の意味も込めて。

ある時、桑畑さんに「お薦めの本はないですか」と聞くと、「そうですね、値段の割には字数が少ないですが」と、笑いながら薦めてくれたのが、照井翠さんの「龍宮」（角川書店）だった。定価は、2300円。私は、俳句はあまり好きでもないし、値段も高いなど、ちょっと思ったのだが、桑畑さんの手前、見栄も張って購入した。

家に帰って読んでみた。良くわからない句が多い。しかし、あとがきには、こうあった。

「釜石市で東日本大震災に遭遇し、被災したことで、私の精神世界は激しく揺さぶられ、ひたすら生と死を見つめることになりました。以来、人の死に寄り添い、祈り、感謝する日々の中から生まれ出た句を柱に据え、未熟ながらも一人の人間として、津波による無念の死を迎えざるを得なかった数多くの方々への鎮魂の思いを込めて、この一集を編むことを決意しました。」

そこで、私の読み込みや感受性が欠けているのだなと反省し、合計4回読んでみた。句集の奥付には、一般書には珍しく、照井さんの住所も書いてあった。それは、桑畑書店と同じ町内だった。そのこともあって、照井さんに、感想のようなものを書いて送った。どんな手紙を書いたか、写しも見つからないので忘れてしまったが、このような経過で、その後釜石の仮設飲食店街「呑兵衛横町」で照井さんと2回も飲む機会を持つことが出来た。照井さんは現役の高校教師、私は退役の高校教師ということで、多少の共通点もあって、かなり深酒もしてしまった。

その時か、その後かに、私が、照井さんの俳句を何編か、エスペラントに訳し送った。私は、2015年に「震災の記憶」という、私が被災地で撮影した写真に日本語・エスペラント対訳の文を付けたものを出版し、2016年には「震災の遺品」という、被災地で預かってきたものを題材にした同じような本を出した。それで、この「震災の～」というシリーズで2017年にも何か出したいと思っていて、その3冊目にしたいという思いもあった。

どんな本にするか

俳句をただ訳しただけでは、全部でも6行で終わってしまうので、これでは物足りない、照井さんの俳句に合った写真を添付し、それに解説を対訳で付けることを考えた。当初は50ページくらいの本にしたいと思ったが、訳したい句があまり抽象的だと、それに合う写真がないし、具体的な句であっても、被災地の写真でないと余り意味がない。それで最終的には、32ページの本で、31句、31枚の写真の本になった。また、エスペラント訳だけでなく、何か国語かの訳も入れようかとも思ったが（世界のエスペランチストに頼めば、不可能ではない）、ページ構成がうまく行きそうにないので、それはあきらめ、結局32ページに納めることにした。しかし、被災地の写真は福島県から岩手県の北端までに及び、震災直後から現在までと、地理的にも時間的にも、震災の記録になっている。もちろん全部カラーだから、プロの写真ほどではないにしても、それなりに見栄えはするものと考えている。

値段は「ワンコイン」とした。そして、何と1000部も印刷することにした。今まで私が出した本では、たいてい300部で、時々500部、そして「震災の記憶」だけが、増刷が掛かって600部が最高である。今回は、照井さんがついていること、他人が参画していると売りやすいということ、こっちもそれだけ気

合を入れて普及する決意をしたことで、1000部を印刷して頑張ることにした。皆さんにも、1冊の注文でなく、最低5冊を注文して、「震災を忘れない」「唐丹の子どもへの震災支援金を生み出す」という、大きな運動のひとつなのだという認識で、本の普及に協力をお願いしたい。

俳句をどう翻訳するか

俳句の翻訳は、これまで本当にはしたことがない。自分の俳句なら、好き勝手にいじって、訳も意識でも構わないが、他の人の俳句ではそうは行かない。俳句は、外国でも結構流行っていて、その場合でも、5-7-5の音節にするのが普通である。しかし、元の俳句からそのように型にはめ込むと、無理が生じる。たとえば、

生き死にの釜石の川鮭上る

という照井さんの句があるが、「釜石」だけでも、Ka-ma-i-si と、4音節も取ってしまい、川 (ri-ve-ro) と冠詞の la を入れると、それだけで8音節になってしまい、どうしても字余りになる。また逆に、短すぎて別の単語を補わないと、5音節にも7音節にもならなかったり、またどうしても、4音節、6音節で終わってしまったりすることもある。そういう場合に、いろいろいじくりまわして合わせようとする、もう照井さんの句ではなくなってしまう。そこで、照井さんと相談して、5-7-5にはとらわれず、忠実にエスペラントに直すことにした。こうしておけば、外国のエスペランチストがそれを自分の母語に直す場合でも、原句に忠実に詩の形に直すことが出来る。そうは言っても、ただ単語を並べるのでは「詩」としての意味も味わいも無くなるので、3行に並べて、それなりに読むときの響きには気を付けた。

これからのこと

私の「震災の記憶」は、2016年12月にベトナム語に翻訳されて出版された。同じように、この本も、外国語に翻訳して出版してほしいと、私も照井さんも願っている。

東日本大震災 震災鎮魂句

Hajkoj pri la Japana Katastrofo

著者： 照井翠 TERUI Midori 堀泰雄 HORI Jasuo
発行所： ホリゾン出版 371-0825 群馬県前橋市大利根町 2-13-3
定価： 本体 500 円 + 税 Prezo: 5 eŭroj
ISBN : 978-4-939088-32-2 C1092 ¥500E